

人を好きになると・・・

(2014.1.06)



1 2月の園便りに、明治の初めの江戸の人々はみな笑顔で幸せそうであったと、書いた。今年も笑顔で初め、笑顔で過ごしたい。よく笑う人は、健康でボケないという。笑いがストレスを発散させ、脳細胞を活性化させる。笑顔は人も社会も明るくさせる。

「好意の互惠性の法則」というものがある。「人は誰かに好かれると、その人に好意を持つ」という。逆に、敵意を持つと、相手も敵意を持つようになる。好意が好意を呼び、悪意が悪意を呼ぶのである。ニコニコと笑顔で接せられると、つい、こちらも自然と笑顔になってしまう。目をつり上げ、険しい顔をすれば、こちらも険しくなり、身構えてしまう。

子ども達の中には、「やったことないから」「できっこないから」と最初から尻込みする子がいる。子どもは怒られ怒鳴られてばかりいると、顔も引きつり暗くなる。内向的になり、否定的自己像を持つようになり、自信を失い、自発性もなくなる。愛情豊かに育てられ、誉められている子は、肯定的自己像を持ち、自信があり、積極的になる。失敗しても再チャレンジし、成功するまで続ける。

集団になじまず、教師のことを聞かず、乱暴狼藉、やってはいけないことをする子がいる。望ましくない行動をとった時は無視して、望ましい行動を取った時に、繰り返し褒め続けていると、自然と望ましくない行動が少なくなり、望ましい行動が増えていく。険しい顔をして怒り、叱咤ばかりでは効果が無い。望ましい行動を取った時に笑顔で「できるじゃない」と誉めていくと、良いことをした時の方が、楽しく、心地よくなる。いわば気分の悪い旧道より、心地よいバイパスの通行量が増えることにより、旧道が狭くなり、やがて消えていくのである。

人と人が関係する社会や組織、家庭でも同様のことが言える。日常生活の中で、相手の良いところを見つけて、あの人は素晴らしい、私もああいうところは真似したいとすると、自分も高まり相手も更に良い人になり、お互いに高めあう関係になる。反対に悪いところばかりが目につき、心の中で非難ばかりし合う組織は、足の引っ張り合いになってしまう。同じことは夫婦の間でも言える。家庭が明るくなる夫婦と、暗くなる夫婦は、良いところを見て生活するか、嫌なところばかり見てしまうかで決まる。教師と生徒の関係でも、教師が子ども達が大好きで、誉めていると、子ども達も教師が好きになり、学習効果も上がるという。

子ども達の健やかな成長と発達のためには、笑顔の溢れる愛情豊かな家庭と社会が必要不可欠である。



感じることから始まる（その一）

(2014.2.03)



私は、子ども達の成長・発達のためには、直接体験が重要であると考えています。より良い環境の中で、自ら考え、決断し、実行し、その結果を自ら受け入れ、次の活動に繋げていくことが、子どもの成長・発達を促します。しかし、考え・決断・実行する前に、「感じること」が大切です。

2月は豆まき、節分で始まります。節分に備えて、豆を入れる容器を作り、鬼のお面を作ります。節分という季節の行事の中で、保育のあり方、子どもの見方など、いろいろ考えさせられることがあります。鬼に対する感じ方も、それぞれみんな違います。節分の日に幼稚園に鬼が来るという話だけで、節分の日には「幼稚園に行きたくない」と家に閉じこもって、一步も外に出ようとしない子もいます。鬼なんかちょっと恐くないと、前日まで威張っていた子が、担任のお尻にしがみついて、大泣きしたりします。また、泣きながら果敢に鬼に挑んでくる子もいます。鬼との対決をまるで楽しくてしょうがないと、嬉々として豆をぶつけ、走り回っている子もいます。あまり脅かしてもいけませんので、後半は子ども達に豆をぶつけられながら逃げ回り、泣き声で「どうか許して下さい。勘弁してー」と謝ります。最後にお面を取り、顔を見せて「脅かしてごめんなさい」と頭を下げます。すると、さっきまで大泣きしていた子まで、ニコニコ顔で「ちょっと恐くなかったもんねー」「鬼は園長先生だって分ってたもんねー」なんて言い出す。そのくせ、鬼と記念写真を撮る際に、鬼の面をもう一度つけると、今、「鬼は園長先生だと分ってたもんねー」と言っていたのに、また泣きだします。分っていても鬼は怖い子がいるのです。

昔、あるお母さんから「園長先生は、子どもは元気がいい、と言いつぎる」と言われたことがあります。確かに、みんな元気いっぱい、ダイナミックに走り回って欲しいと願うことは当然のことです。しかし、「子どもは全て元気でダイナミックでなければならない」と一方的に強制することは、少し窮屈になってしまいます。おとなしく、静かな子も良いのです。豆まきの鬼ひとつについても、子どもの感じ方はみんな違うのです。みんな違う感じ方を大切にして、共感することが大切です。大人の求める「結果」を重視すると、子どもは自由に動けなくなってしまいます。驚きや、恐怖心・不安、未知への興味・関心、認められる喜びを理解し、共感することが大切です。認められ、共感する中で、子どもは自ら成長します。子どもを丸ごと受容し、そのままの君が素晴らしいと、認められることから、子どもの心は育っていくように思います。

時は今、季節を分かち節分の時、春がもうそこまでやって来て、春と冬が押し合っています。子ども達と季節を感じ、春の香り、春の色を探しに行きましょう。



雪合戦！

(2014.3.03)



立春を迎え、梅がつぼみを開き始めた頃に、急に寒気が下りてきて、大雪になった。梅の花も驚いたように、すぐにしぼんでしまった。地域によって、ずいぶん雪の量が違った。絹幼稚園周辺はすぐに融けたが、北竜台は雪国のように積り、登降園、バスの運行は大混乱になった。

一週間後にまた、降った。この日、車に忘れ物をしたので、駐車場へ行こうとすると、子ども達が雪を投げてきた。なんと、雪の舞う中、半袖・半ズボン、素手で私に戦いを挑んでくる強者が何人もいた。

「おいおい、上着を着て、せめて軍手でも着けて来い」と言うのと「上着なんかないもん。軍手は濡れてしまうからいやだ！」と言うなり、顔面にバシッ！と一発くらった。こうなったら、やるっきゃないと応戦。園庭を駆け回り、雪のつぶてが飛び交い、子ども達を返り討ちにするつもりが、豆まきの鬼退治の続きのように、全員で私を敵にして攻めてくる。多勢に無勢、劣勢になると一人二人と味方になってくれる子どもでてきた。敵も味方も入り乱れ、乱戦になった。誰が敵か味方が分からない中で、A君と対峙した。「君はみかたか？」と聞くと、一瞬、考え込んで「確か、お母さんが、O型だ、と言ってたよ」と。「それなら理事長先生も、同じ大型だから味方だ」と。なんだか訳も分からず、一件落着。

上は雪で、下は汗で、びしょりになり、事務所に戻ると、発表会に歌うのだろうか、「雪やコンコ・・・山も野原も綿帽子かぶり・・・」続いて「花咲山を・・・みんなの力で・・・」と、可愛い元気な歌声が聞えてきた。なんだか、イヤーな感じの世の中になってきたなと思っていたが、たくましいふたばっ子の姿と歌声に、この国の未来も捨てたもんじゃな。きっと彼等が明るくしてくれると思った。

☆感じることから始まる(その二)は次回にしました。



学ぶことと、人と関わる力

(2014.5.01)



教育・成長すること、学ぶことは大切である。学問は大切であるが、学ぶことは学問だけではない。学ぶことの中で、一番大切なことは、人間関係である。昨今、希薄になっているように見える。人間関係＝人間力は、教科書で学べることで、教師に教えられて身につくものでもない。日々の生活の中で、特に幼児期の遊びの中で、体で覚えていくことが基礎となる。

私くらいの年になると、たくさんの友人・知人の生き様を見てきた。世の中で活躍し、充実した人生を歩んできたと思える人は、人間関係の能力が高い。これこそ人間力であると思う。人と関わる力があるから、良き先輩に恵まれ、良き友人、知人に囲まれ、そこから学び成長する。そして、引き立てられる。

フェイスブックやLINEで、何十、何百人の仲間(?)を作っても、真の友人はいない。直接話したことも、顔もない友人では、人間関係は育たない。最近の無差別殺傷事件の犯人達は、みんな孤独で、自分の存在すら否定している。自分は誰からも認められず、どうでもいい存在だと思っている。人は人との間でしか生きていけない。人と支え合ってしか、生きていけない。一人では、孤独では生きていけないのである。

人は他人との間で、ルールを守り、スムーズに気持ちよく生活していかなければならない。それが人間関係である。そして、そのためには、人の立場になって、人を思いやることができなければならない。人と同じ思いに立って、共感し、一緒に喜び、悲しみを共有することができなければならない。幼稚園では、大勢の、多様な、自分とは違う友達や、自分と同じ思いをする友達と、仲良くなったり、喧嘩したりして、どうしたら友達とうまくやっていけるか、葛藤しながら、人と関わる力をつけてゆく。

最近、子ども達の間で、「ずるいぞ!」「汚いぞ!」という言葉が聞かなくなった。順番を守らない、ルールを守らない、仲間との約束を守らない、自分達だけの秘密を守らない奴は「ずるいぞ!」「汚いぞ!」と非難される。それを守ることが、人間関係を作る上で、最低限の条件となり、人に信頼されることになる。これは「遊び」の中でこそ、体得できることである。今は、まさに春爛漫、子ども達の季節である。自然の中で、友達と関わりながら、思いっきり遊ばせたい。



感じることから始まる（その二）

(2014.6.02)



随分前のことになってしまいましたが、二月の園便りで、大人の思いが優先した「結果」を子ども達に求めるより、子ども達の感じるもの、感性を大切にしたいと述べました。今月はそれに引き続いて、大人の価値判断に合わせた子どもの姿より、子どもが感じているものに、大人がどう寄り添っていくべきか、考えてみたいと思います。

絵画制作は、子どもの自由度が高い活動のように思いますが、実際はそうではないことが多いように思います。豆まきの豆を入れる容器を作る際も、ほとんど保育者の指示通り、みんなが同じものを作っているのが一般的です。容器を作る素材をできる限り多く用意して、自分で考え工夫して、あるいは友達と影響し合い、協力したりして、試行錯誤して作ることも、作り方を全て指示して、言われた通りに作るのでは、大人から見た出来栄は大きく違うかも知れません。しかし、出来栄は悪くとも（?）、子どもが、自分で考え、失敗したりしながら工夫し、チャレンジすることの方が、子ども達の成長・発達には大切なことです。

鬼の面でも同様のことが言えます。「角は2つね。色は赤か青」と指示すると、角が3つ、黄色い鬼はダメ、角のない髪の毛だけでもダメなんだ、と制約されてしまう。父の日のお父さんの顔でも、みんな同じ絵になってしまう。お父さんの顔を描いて、バックが空いていると、もっとしっかりバックまで塗りましょう、と指示します。自由画でも、空まで意識し、白い部分も全て塗るようになるのには、かなり発達を待たなければできません。「クレヨンで描いて、次は絵の具を」と指示します。最初から絵の具で描きたい子もいます。

指示通り描いているところに、自由も創造もありません。子どもの思い・興味・関心を大切にすることが、創造性や意欲を引き出すことになります。大人が全て決めて、指示し、言うとおりに行動することではなく、自分で感じて、考えて行動することが大切です。



ふたばっ子いろいろ

(2014.7.01)



A君の家では、お父さんがやっと休暇を取り、家族で沖縄に行くことになった。お父さんは、A君が大喜びすると思った。沖縄行きを告げると、A君は何と、「幼稚園を休みたくないから、僕は行かない」と、つれない返事。「僕は一人で留守番しているから、みんなで行って来たら。ご飯はコンビニでお弁当を買って食べるから大丈夫」と言う。何とか説得して、家族揃って沖縄旅行を満喫したそうですが、幼稚園児でこの自立心、なんとも立派としか言いようがない。「幼稚園大好き。」大変光栄です。3歳児の中には、園に慣れてきて楽しくなり、休日に幼稚園が休みになると、「幼稚園に行きたい」と泣く子がいる事はよく聞かすが、家族旅行を拒否して、あわやホームアローンになりそうになった話は初めてである。こんなに好かれて幼稚園長冥利につきる。

休日で人ごみのショッピングセンターを歩いていたら、吹き抜けの2Fから大きな声が響いた。「園長ゴリラー！」と。見上げると、あのワンパク坊主のBだった。周囲の人々が「園長ゴリラ」と呼ばれた人物は誰かと、探しているのが分った。恥かしいので、サッサと歩いて行こうとすると、更に追い打ちがきた。「オーイ、エンチョウゴリラ。何をすましてんだヨー」、私は彼をにらみつけ、口に人差し指を立てて「シー」と黙らそうとした。それがかえってまずかった。彼の視線の先と、私の様子から「エンチョウゴリラ」は誰か、周囲の人々に判明し、視線が私に集中した。私は彼の方を向いて、声を出さずに「園長先生だよ」と大きく口を動かして、早々に退散した。翌日、幼稚園で彼に「これからは、園長先生と言って下さい」と、お願いしたのは申すまでもありませんが、ご家庭でも「長幼の序」をしっかりと教え、ユメユメ外では「エンチョウゴリラ」と言うてはいけないことを教えて下さい。(勿論、彼らがエンチョウゴリラと言っているのは、親しみを込め、私を好いてくれているからだ、と理解していますし、とても嬉しく思っていますが、外ではダメです。)

卒園式間近のある日の朝、幼稚園に着くと、私の机の上に一通の手紙。C君からだった。封筒の宛先にはたどたどしい字で「あさだきよとしへ」と、偉そうに呼びつけである。中を開けると一言、「ようちえん、たのしかった」と、一言だけ書かれていた。手紙の基本によく挙げられる、本多作左工門の、「一筆啓上、おせん泣かすな馬こやせ」という文章があるが、C君の文章も、心情を正確・簡潔に表していると感じた。「えんちょうせんせいへ」ではなく、どこからか個人名の情報を仕入れ、敬称まで書く余裕もなく、楽しかった幼稚園生活への思いを明確に伝えたかったのだろう。

保育サービスと子どもが保育を受ける権利

(2014.9.01)



子ども子育て支援法が成立し、いよいよ、こども園化が促進されています。本来は、幼稚園と保育園の区別（差別）をなくし、保護者の負担が保育所並みに軽減される良い施策であると思っていました。幼稚園も保育園と同じような（同一ではない）施設型給付を受けることになり、保護者は所得に応じて、利用者負担が定められます。そして、本来は幼保一元化を目指していたのですが、幼稚園も保育園も温存して、制度が複雑で分かりにくくなっています。内容も未確定の部分が多く、混乱しています。

それより心配なのは、保育の中味です。こども園として施設型給付を受けると、保育園同様に早朝から夜まで子どもを受け入れ、給食も完全給食でなければならないなどと、規制が厳しくなります。これでは先生方も長時間、保育に関わらなければならなくなり、教材研究の時間もとれず、保育の充実が図れなくなりかねません。指導計画も、子ども一人一人の記録を取る時間を確保することも難しくなりそうです。春や秋の天気の良い日に、お弁当を持って園外保育に行くこともできなくなってしまいます。

女性の労働力確保、お母さん方の就労支援ばかりに目がいって、子どもの最善の利益なんて、どこかにいってしまいます。他方、規制緩和と称して、保育園の設置基準を緩め、園庭などはない駅前の狭い一室に閉じ込めても良いし、営利目的の株式会社でもなんでもOKにしています。待機児童をなくすことが最大の目的で、子どものことなど考えていないのではないかと。規制緩和の時代に、保育内容に関わる運営が、がんじがらめに縛られては、自由な保育、余裕のある保育は望めません。少子化対策こそ、これからの日本の将来のために急務であるはずで。今の子育て支援対策は、女性の就労促進にはなっても、少子化対策にはなりません。

もっとゆったりと楽しく子ども達を育て、子ども達と喜び合える生活環境を作ることが、少子化対策で大切であると思います。そして、それが保育、教育現場の願いです。これからも子ども達の豊かな生活を守っていきます。「子ども達の生活が第一」です。あれ？いつの間にか消えてしまった政党のスローガンみたいになってしまった。しかし、「子ども達が第一」は、ずっと昔から、そしてこれからも守っていきます。決して消しません。



子ども達が充実した人生を生きるため

(2014.10.01)



私のメモ帳にこんな文章が・・・「持っている時には、気にもかけなかったのに、なくしてしまったら、急に大事になるものは・・・さて、なんでしょう？」・・・少女の時間、大人になって初めてわかる、あの頃の時間は、二度と手にいれることはできない。永遠の喪失感。みんな、こんな思いを必ずする。

少女の時間は意識できる。それよりもっと大事な時間がある。幼児の時間は、大人になってからは、記憶にないことが多い。無意識の世界だが、心の奥にしっかりと根付いて、意識の世界を支配することになる。幼児期は人生の脚本となり、無意識のうちに人の人生を決定づける。幼児期には幼児期にふさわしい生活をさせないと、後ではできない。その時代を十分に体験しないと、次のステップを強く踏むことができない。だから、幼児期は根っ子の時代、人間の基本、人格の基礎づくりの時代という。幼児期は取戻しができない。幼児期の生活をしっかりとさせないと、基礎のない人格になり、思春期以後崩れてしまう。

幼児期にふさわしい生活とは、自由で伸び伸びとした「遊び」を中心にした生活である。幼児期の「遊び」は、生活そのものであり、学習であり、仕事である。幼児期は「遊び」から生きていくためのほとんどのことを学ぶ。人とどうやればうまく関わっていけるか、「遊び」に集中することから、意欲・忍耐力・そして、失敗を繰り返しながら、成功までやり遂げること、成功体験から自尊感情を育て、自分ができる、自分はすごいと自己肯定感を持つようになる。

そして、その元になるのは親や周囲の大人の姿勢である。周囲の人々に認められ、愛されることから、自己肯定感を持ち、人生を肯定的に見るようになる。「お前はバカだ、のろまだ」と、子どもを否定的に見ていると、否定的自己像を作り、人生を否定的に見るようになる。たった数年の幼児期、子育ても肯定的に楽しまなければ、後悔することになる。ペリープレスクールでは、幼児期にふさわしい生活を充実して送った人間は、その後の人生においても充実した人生を歩んでいるという実証的な調査・研究結果を示している。



子ども集団の復活を！

(2014.11.01)



「少子化」が話題になると、社会の将来、経済への影響が中心となる。子ども達への影響は、それほど話題にならない。子ども達の側から考えると、少子化により子ども達の生活そのものや、人間として、成長・発達していくために必要なことが失われている。子どもを取り巻く環境の変化の中で、悪化したものを取り上げると切りがないが、子どもの集団が消え、子どもの生活が大きな影響を受けている。

一つは、集団で守られてきた子ども達の生活環境が危険になった。子どもの誘拐、連れ去り、性犯罪が多発している。一人でいるところを狙われている。子どもが集団でいれば誰かが見て通報することになり、防げた事案がほとんどである。誘拐の内容が昔と違ってきている。昔は有名人や金持ちの子を対象にした金銭目的の営利誘拐がほとんどであったが、今は、子どもなら誰でもいい、一人でいると誰もが狙われる。子どもを取り巻く環境が恐ろしく危険なものになってしまった。

子ども達の遊びの中で、「ズルイ」「汚いぞ」と言い合う言葉が聞かれなくなったように思う。集団のルール、規範・秩序といった、集団の中でこそ学べることも少なくなった。集団の遊びには、高度になればなるほどルールが厳しくなる。元来、遊びは集団の中で年下の子どもが年長児の遊びを見て、模倣し、伝承・発展してきた。子どもの集団が消えて久しい。大人の中でも、大集団で遊んだ経験がない者が増えている。鬼ごっここのバリエーションは100以上あると言われるが、今行われている鬼ごっこは、一人が鬼になって、タッチされた子が次に鬼になりと繰り返す鬼ごっこや、色鬼・氷鬼・高鬼、どろけいなど単純な鬼ごっこがほとんどである。手つなぎ鬼のように、集団が多いほど緊迫感があり、手を離したらタッチできない自制を求められる鬼ごっこは少ない。3人手つなぎ、4人手つなぎ、30人以上の全員手つなぎといった、大蛇が獲物を巻き込むような壮観なものは、今では、あまり見かけない。そう言えば、Sケンとかひまわりのような、ぶつかり合うものはなくなった。そこでは、ルール違反を巡って、必ズルイゾ！汚いぞ！と言い合うことが必ずあった。集団の遊びの中で、ズルはしない、汚いことはしないというフェアな生き方を学ぶ。少子化のなかで子どもを一人にしないで、危険から守ることと、意図的に子ども集団を作り、そのマイナス面を埋めるように働きかけ、フェアプレーを学ばせたい。

